

## 工作について 先生方に伝えたいこと



小嶋成夫

元 有明教育芸術短期大学 教授

「手遊び」というと保育やレクリエーション課程の中から「手遊びうた」をいくつか思い出すことができる。“コレックライノ オベントバッコニツ オニギリ オニギリ…”と楽しく歌いながら手や指を動かして、もの形をつくったりしてたのしむ活動である。

そこでの「手遊び」のねらいは、大人と子どもの大切なスキンシップやコミュニケーションの時間としたり、さらには手をいろいろ動かすことで脳の発達を促しリズム感を養うことにつながるともいわれる。他にも、数を数えられるようになったり、歌に出てくる生き物や食べ物で季節を覚えたりなどと、手遊びは乳幼児期にとっても大切な遊びとなっている。

いっぽう、歌や動作を伴わず、先生や大人の仕草を真似てということでもなく、ただひたすらに手を動かして楽しむ「手遊び」がある。土遊びや水遊びにはじまり、泥でだんごをつくったり、木片や流木をただ切ったり削ったり、すべすべになるまでやすりで磨いたり、その行為自体が好きで楽しくてその行為を繰り返すといった「手遊び」である。この活動にははっきりとした終わりはなく、これで完成といったきまりもない。飽きたら終わりなのであるが、上手とか下手といった他人が入り込む余地はない。やりかけの材料は子どものズボンのポケットや机の引き出しから忘れたころ出てくる。手垢で黒ずんでも引っ張り出して眺めていたりする。そして、また続けたりする。

どうして、いつまでも同じことをくり返すのだろうか。

何のためにつくるかとか、どのように使うかとか、何時までにといった目的や条件はないからか。どのようにつくるか、どれがよいかという基準もゴールもないのである。

それは出来上がることよりも、つくっている時の方が、快感を得るからである。秩序だった思考や意識はないが、気持ちの上で矛盾はない。「好きだから」、「たのしいから」、「やりたかったから」、「続けたいから」やるのである。けれども行為に浸っている本人の感覚は研ぎ澄まされ、手先、指先に集中される。その根底にあるのは、人として自らがものを作っている存在であることを確かめ、手を動かし手を通して、物をつくるために必要なさまざまな感覚や能力を獲得していく行為だからである。

図画工作科の教科書は、この人間的、基礎的、主体的、身体的取り組みをもとに造形的創造表現活動の資質・能力の育成を図るべく活動内容を提案している。学習のめあてはほとんどの題材に「つくることをたのしもう」とある。図画工作科の学習では題材ごとに作品や活動をつくりだすという特徴があるが、そのことが活動するものへの過度なプレッシャーとなったり、意識の上で矛盾を生むようなことは避け、徹底して「つくることをたのしむ」世界を充実させていただきたい。

